

# 有島武郎とキリスト教

太田 哲男

## Arishima Takeo and Christianity

OTA, Tetsuo

J. F. Oberlin University, *Obirin Review of International Studies*, No. 20, 2009  
桜美林大学『国際学レビュー』第20号（2009年）

## Summary

This essay is based on my speech, “Arishima Takeo and Christianity”, the speech was given at a conference of Japanese Association for the Study of Puritanism held on September 27, 2008.

Arishima Takeo (1878-1923) was baptized in 1900 and apostatized in 1911. We can find quite a few writers who were baptized and apostatized in Meiji Japan.

In this essay I make a survey of the relationship between writers and Christianity from the 1880s to the 1910s in Japan.

Next I inquire into the form of Christianity in Arishima’s novel, *Aru On’na* (*A Woman*, 1919). The main character of this novel is Satsuki Yoko. She intends to be independent and women's independence is the main topic of this novel.

One of the most famous Christians in Meiji Japan was Uchimura Kanzo (1861-1930). In the novel there is a man named Uchida who is said to be modeled on Uchimura. One of the themes of this novel is Christianity and I mainly discuss this theme.

\* \* \*

## (一) まえおき

なぜ有島武郎を取りあげるかといいますと、最近私は有島武郎の著作を面白く読んだから、ということです。私の勤務先の大学に中国人留学生がいて、中国に帰ったらある大学で日本語教師をすること。修士論文を仕上げ、帰国までの期間に日本語の本を読みたいというので、それではと一緒に童話を少し読みました。宮沢賢治、芥川龍之介、小川未明の童話をそれぞれ2、3。そして有島武郎の『一房の葡萄』（岩波文庫）です。調べてみますと、芥川の「蜘蛛の糸」が1918年、宮沢賢治『注文の多い料理店』の刊行が1922年、小川未明の「赤い蠟燭と人魚」が1921年、有島の「一房の葡萄」の『赤い鳥』への発表が1920年。意図していたわけではないのですが、結果的にどれも第一次世界大戦後の作品でした。これらの作品に共通する人道主義的な雰囲気の中に、有島も生きていたといえるのでしょうか。私自身は「一房の葡萄」を中学時代に読んだと思いますが、考えてみれば、「救し」がテーマになっています。もう一つ印象的だったのは「一房の葡萄」の最後の場面です。そこには、

それにしても僕の大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇えないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。（『一房の葡萄』岩波文庫、22頁）

と書かれています。昔読んだ印象から、私はこの先生は日本人だと何となく思っていました。じつはそうではなく、この作品の冒頭に、「僕の学校も教師は西洋人ばかりでした」と書かれていたのです。この「一房の葡萄」が横浜に住んでいた有島が子どもだった時代を念頭に書かれているとすれば、それは1880年代後半となります。この作品に出てくる先生は、明記されてはいませんが、アメリカから来ていたクリスチャンで、実際の会話は英語でなされていたのでしょう。

ちなみに、絵の具を盗んで友だちと先生から咎められたということは、有島自身の体験に基づくといえます。ただし、「一房の葡萄」に描かれた「救し」は、必ずしも同じときの体験ではなかったようです。

「一房の葡萄」に惹かれて、有島武郎の小説『或る女』を読みました。作家の加賀乙彦さんが『或る女』を非常に高く評価されていて、その評価に惹き

つけられて私も読んでみた次第です。加賀さんは、『私の好きな長編小説』（新潮選書、1993年）の中で、

明治以後、近代文学が日本文学の中に発生しまして沢山の小説が書かれましたが、外国語に翻訳して、そして外国の一流の小説と並んでも恥ずかしくない作品というものを選ぶとしたら、私はまず第一に『或る女』だと思います。おそらくここ百何年かの日本文学の達成した最高の成果として、『或る女』は忘れられない傑作だというふうに思います。(181頁)

と書いています。加賀さんの『日本の10大小説』（ちくま学芸文庫）でも、『或る女』が取りあげられています。そして、ドナルド・キーンが、明治大正の小説中一番感銘を受けた小説として『或る女』をあげ、それを非日本的であるとともに「ヨーロッパ文学の真髄を獲得した」（38頁）小説として褒めていることを紹介しています。そんなに高い評価がなされるものなら私も読んでみようと考えたわけです。これを読みますと、確かに面白かったのですが、特にこの長編小説の初めの部分に、キリスト教に関わる記述がわりあいに出てくることにも興味を引かれました。たとえば、内田という、内村鑑三をモデルにしていると注記されているような人物が出てくるわけです。

有島の「カインの末裔」などという作品は、私にはあまりピンと来ないのですが、『或る女』はなるほど面白かった。最近そういう読書経験がありましたので、本日は有島について発表させていただこうと考えた次第です。

そこで、まず、有島武郎とキリスト教の関わりについてお話をし、そのあとで、有島武郎唯一の長編小説『或る女』、1919年に刊行された、400字詰め原稿用紙ですと約1千枚の長編ですが、これについてお話をさせていただこうと考えます。

## （二）有島武郎とキリスト教

少し古い本ですが、武田清子さんが編集されました『思想史の方法と対象』（創文社、1961年）のなかに、武田さん自身が「キリスト教受容の方法とその課題 新渡戸稲造の思想をめぐって」という論文をお書きになっています。武田さんはその中で、日本への「キリスト教の受容、あるいは、土着方法として概括して次の五つの型が見られるように思う」として、類型化をされ、その第5として「背教型」を挙げています。それによりますと、「背教型」と

というのは、「キリスト教を捨て、あるいは、教会に背き、いわゆる背教者となることによって逆説的にキリスト教の生命の定着を求める」類型（273頁）ということになります。もう少し詳しく言いますと、

〔背教型は〕日本のような異教的な精神的土壤にキリスト教が根をおろそうとする時、上記のような諸々のゆがみをキリスト教そのものが持つこととなった場合が多い（例えば儒教的な倫理思想を濃厚に浸透させていたり、キリスト教会に家族主義的共同体の要素をしのびこませていたりなど）。そうしたキリスト教会の中に「良い子」となって安住することの「偽善」にたえ得ず、キリスト教を捨てることを宣言し、あるいは、教会を脱退し、背教者の烙印を敢えておされることを通して、キリスト教から受けた「生命」を日本の土壤に実現して生きようと追求するようなタイプであって、有島武郎などもその一人と云えると思う。（278頁）

ということで、有島が「背教型」に分類されているわけです。

武田さんの論は、文学者に限定されたものではないのですが、日本の近代文学者とキリスト教との関係ということになりますと、関係を持つ文学者は少なくありません。かつて教文館から全14冊の『近代日本キリスト教文学全集』（1975～76年）が出版されたことがありました。この全集に取りあげられた人物のうち、主として小説家に限定して年表を作成してみました。（表・参照）

これを見ますと、日本の近代文学の成立・展開にとってキリスト教はかなり重要な役割を果たしたということがよくわかり、なかなか興味深いところです。しかし、生涯にわたってキリスト教の信仰を持ち続けた作家は少なく、キリスト教から離脱してしまった作家が多い。有島武郎と同世代の作家では、島崎藤村や志賀直哉がそうです。（ここに出てくるのは文学者にほぼ限られますが、キリスト教の影響は、文学者に限られるわけではなく、もっと広範に及びました。しかし、ここではその点にはふれません。また、藤村や志賀はもとより、有島の場合も、「背教者」というより「棄教者」あるいは「離教者」ではないかという問題もありますが、その点にもここでは立ち入らないことにします。）

小山内薫は、1923年に「東京朝日新聞」に『背教者』という長編小説の連載を始めました。これは、1900年のころに内村鑑三の周囲にいた若者たちを描いたものだとのことです。この点について、『近代日本キリスト教文学全

集6』所収の志賀直哉についての小泉一郎氏「解説」から借りますと、小山内のこの小説について内村は、その「日記」の中に、

背教者は小山内君一人に止まらない。我国すべての文士、哲学者、若き政治家等は背教者であるとして、差支えない。余の許に学んだ、許多<sup>あまた</sup>の文学士、法学士、理学士等は、極めて少数を除く外は、皆背教者と成

新島 襄	☆	1843～1890				
植村正久	☆	1857～1925				
内村鑑三	☆		1861～1930			
森 鷗外	★		1862～1922			
夏目漱石	★		1867～1916			
幸田露伴			1867～1947			
北村透谷			1868～1894			
徳富蘆花			1868～1927			
木下尚江			1869～1937			
国木田独歩				1871～1908		
島崎藤村				1872～1943		
岩野泡鳴				1873～1920		
有島武郎				1878～1923		
正宗白鳥				1879～1962		
志賀直哉					1883～1971	
山村暮鳥					1884～1924	
武者小路実篤					1885～1976	
賀川豊彦					1888～1960	
長与善郎					1888～1961	
芥川龍之介						1892～1927
芹澤光治良						1897～1993
中河与一						1897～1994
横光利一						1898～1947
堀 辰雄						1904～1953
坂口安吾						1906～1955
太宰 治						1909～1948
北条民雄						1914～1937
中野重治	★					1902～1979
清水安三	★					1891～1988
永井荷風	★			1879～1959		
吉野作造	★			1878～1933		

注) ☆は参考までに掲げた。

★は、『近代日本キリスト教文学全集』には取りあげられていないが、参考までに示す。

つた。(1923年5月2日条)

と書いているとのことでした。

また、志賀直哉には「内村鑑三先生の憶ひ出」(1941年)という文章があります。1900年に、18歳だった志賀直哉は、友人に誘われて内村の許を訪ねる。そのときから志賀は内村と接するのですが、7年余りのちに志賀は内村から離れてしまう。きっかけとなったのは、志賀の男女関係についてです。志賀の「内村鑑三先生の憶ひ出」によれば、

私が「大津順吉」といふ小説に書いた家庭内のごたごたした事で、先生の所へ行つた事がある。先生は周囲の者が誰れも認めない内に夫婦関係が出来れば、それは矢張り罪だといふ意味の事を云はれた。[中略]

その後、その事で有島武郎さんが先生の所へ話しに行つてくれた時、先生は他にも先生の所へ来る人で、さういふ事件があり、志賀の場合もさうだし、困つたものだ、と云はれたさうだ。武郎さんは「然し志賀の場合はその人の場合とは異ふでせう」といふと、先生は直ぐ、「それはさうだ」と武郎さんの言葉を認められたといふ。(『近代日本キリスト教文学全集6』146頁)

とあります。男女関係に関する内村の厳格な見方からすれば、志賀のこの女性関係は許されなかった。そこに志賀が内村から離れていった理由があるのでしょうか。

島崎藤村の場合にも似たような事情があると思いますが、彼がキリスト教から離れた理由はともかくとして、19世紀末から20世紀初頭にかけての時代、東京や同志社のある京都には、キリスト教の位置に関して、やや特別な状況があったと言えるかもしれません。島崎藤村の自伝的小説『桜の実の熟する時』(1919年)に描かれているところを例として引用します。

この小説で藤村に当たるのは岸本捨吉という人物ですが、その捨吉が寄寓している家のお婆さんと主人の間で次のようなことが言われています。まず、お婆さんが「捨さんの学校は耶蘇だつて言うが、それが少し気に入らない。どうもあたしはアーメンは嫌いだ」と言います。するとその家の主人は、

お婆さん、そう貴女<sup>あなた</sup>のように心配したら際限<sup>きり</sup>が有りませんよ。今日英学でも遣らせようと言うには他に好い学校が無いんですもの。捨吉の

行ってるところなどは先生が皆亜米利加人です。朝から晩まで英語だそうです。(新潮文庫、33頁)

と語ります。つまり、英語を勉強するということとキリスト教とが深くつながっていたと見ることができます。「特別な状況」と申しましたのは、そういう意味です。また、『桜の実の熟する時』には、1890年に明治学院で開催された第2回のキリスト教青年会主催の夏期学校が盛況だったことが描かれている場面があります。植村正久など、錚々たるメンバーが講師陣にいて、キリスト教の広がりぶりがうかがえます。

こういう流れの中で、地方から東京に出てきた青年たちの中に、キリスト教の世界に入っていき者が次々と出てくることになります。信州から東京に出てきた藤村もそうでしょうし、岡山県出身の正宗白鳥もそうです。もう少し時代を広くとれば、文学者ではないのですが、桜美林大学の創設者である清水安三が同志社大学に入ったのも、このような流れの中にあると言えるでしょう。有島武郎の場合は、「一房の葡萄」に描かれたように、子どものときに宣教師のいる学校に通っていたわけですから、他の人びとは事情が異なるとも言えますが、有島がキリスト教に接近ようになるのは札幌農学校に入ってからですから、青年期にキリスト教との接触が始まるという点では、藤村などとさほど違いがないかもしれません。

なお、有島は母親が南部藩の出身だったので、同郷の新渡戸稲造と因縁があり、札幌での生活をはじめた1896年には、新渡戸宅に寄寓しています。そして、札幌独立協会への入会は1901年です。(安川定男『悲劇の知識人 有島武郎』新典社、参照)

なぜ青年たちがキリスト教に惹きつけられたのかといえば、故郷の家を離れて感じるある種の自由感や青年期の悩みが前提にあったと思われまし、青年期の理想主義的傾向、ある種の正義感と言ってもよいでしょうが、それがキリスト教を媒介として強く意識されるということもあったかもしれません。たとえば、志賀直哉が一時的ですけれども足尾鋳毒事件に関心を持っていたとか、徳富蘆花が大逆事件に対していただいた批判的な気持ちを表明するといった事実を例として挙げるができるかと思います。

有島の場合も、1905年に幸徳秋水などの「平民新聞」にアメリカから記事を寄せましたし、有島の最初の作品「かかん虫」(1906年)は、労働者の姿を描いたものです。

このように考えますと、少し乱暴な言い方ですが、戦後、1960年代くらい

までに大学に入学した若者がマルクス主義に惹きつけられていくのと似たような事情があったかもしれません。1920年代もその点は少し似ていて、私が作成しました年表に出ている吉野作造はもちろんキリスト者ですが、彼が関わった新人会の中にも、マルクス主義に共鳴する学生が増えてくるのが1920年代です。その代表として、この年表では中野重治の名前を書いておきました。

時代を志賀直哉や藤村の青年時代に戻しますと、一旦はキリスト教の世界に入っても、やがてそこから離れる若者が少なくなかった。内村鑑三の言葉ですと、内村の教えを受けた若者たちも、「極めて少数を除く外は、皆背教者と成つた」わけです。その理由はいろいろあったのですが、志賀直哉の場合には、先にふれましたように、男女関係について内村が説いていた厳格な考え方に違和感を持ったということがあるようです。藤村の場合も、男女関係の問題がきっかけになったという点では、似ています。そこにまた、家庭あるいは「家」の問題がからんでいます。

有島武郎の場合について申しますと、有島は1910年、札幌独立教会を退会しています。キリスト教から離れた理由に関して、のちに彼自身が「リビングストン伝・第四版序言」（1919年）でいくつかのことを述べています。

第1に、「私は宇宙の本体なる人格的の神と直接の交感をした事の絶無なるを知つた」

第2に、「基督教の罪といふ観念及び之れに附随する贖罪論が全然私の考へと相容れない事を知つた」

第3に、「未来観に対して疑問を抱き出した」

第4に、「日露戦争によつて基督教国民の裏面を見せられた」（『有島武郎全集』第7巻、筑摩書房、371頁以下）

これらの4点に関する詳しい説明は、ここでは省かざるを得ませんが、申しあげたいことは、有島のキリスト教への帰依と離脱が、一方で彼個人の問題と密接に関連していることは当然としましても、同時に同時代の文学者たちと共通する問題、つまり男女関係の問題や家族の問題、社会観との関係などもあったという点です。

### (三)『或る女』

さて、有島武郎の長編小説『或る女』について、少し述べたいと思います。この小説の筋書きは比較的単純です。美貌で才気あふれる早月葉子という

女性が主人公で、葉子は従軍記者として名をはせた詩人・木部孤<sup>きべこきょう</sup>節という男性と結婚し一児・定子をもうけますが、2カ月で離婚し、やがて、母親たちの紹介で木村というアメリカに暮らす男性と結婚することにして、絵島丸という船でアメリカに向かいます。しかし、船中で倉地三吉という事務長のたくましい性的魅力の虜になり、アメリカに上陸することなく帰国してしまいます。ここまでが、『或る女』の「前編」です。

「後編」に入りますと、倉地と葉子は、帰国して蜜月の状態を続けますが、倉地には妻子がありますから、倉地と葉子の関係は、まもなく新聞でスキャンダルとして報道されます。倉地は船会社から解雇され、2人の関係は次第にぎくしゃくしはじめます。新潮文庫の表紙カヴァーのキャッチコピーを借りますと、「個性を抑圧する社会道徳に反抗し、不羈奔放に行き通そうとして、むなしく敗れた一人の女の激情と運命を描きつくした、リアリズム文学の最高傑作のひとつ」ということになります。

この小説には、舞台となった時代がはっきりと書かれています。「後編」の初めのところに、伊藤博文内閣が桂太郎内閣に変わる話が出てきますので、その記述から、葉子がアメリカから戻ってきたのが1901年6月だとわかります。加賀乙彦さんが指摘されていることですが、有島の『或る女』は、季節の移り変わりを巧みに描写していますから、1900年9月から翌年の夏までを主な舞台としていることが作品自体の記述からわかります。

この作品は、発表された時代には必ずしも人気がなかったようで、そのため有島は、この作品の意図についてしばしば語っています。その中の一つを借りますと、

「或女」で私が読者に感銘して欲しいと思つたものは、現代に於ける女の運命の悲劇的な淋しさといふ事でした。女は男の奴隷です。彼女は男に抱る事なしには生存の権利を奪はれてゐます。(浦上后三郎宛、1919年10月8日。『有島武郎全集』第14巻、114頁)

ということになります。

有島の意図はまさにその通りだと思いますけれども、私は女性の権利拡張という意味での「新しい女」という側面には最後に少だけふれるにとどめ、この作品のキリスト教的な側面についてお話させていただきたいと思います。

有島武郎はキリスト教を離脱した人、あるいは背教者、棄教者です。しかし、有島は、1919年に『或る女』を書き終えたあと直ぐに、3編の戯曲を完

成させます。「洪水の前」「サムソンとデリラ」「聖餐」の『三部曲』ですが、これらはいずれも聖書から素材を得ており、聖書の影響が強く残っていたことはたしかです。有島は、『或る女』を発表した翌年の1920年に、ある手紙の中で、「私は基督教会からは離れましたが基督を離れたとは思ひません。いくら離れようとしたってその圏外に出るには基督は大き過ぎる事を感じておます」（竹崎八十雄宛、1920年3月11日付。『有島武郎全集』第14巻、169頁）と書いています。

さて、『或る女』の、ことに最初の方には、先にふれましたように、キリスト教に関わる記述が出てきます。

第1に、葉子の母が「基督教婦人同盟の副会長」（新潮文庫、14頁）をしていたとあります。その関係で、キリスト教徒にして従軍記者として有名になっていた木部孤節と知り合い、その木部が葉子と結ばれることになったとき、葉子の母は葉子に敵意を持ったようだと言われています。（この木部のモデルは国木田独歩だとのこと。）葉子と木部の間に子どもが誕生すると、葉子の母親は、「基督信徒にあるまじき悪意をこの憐れな赤坊に加えようとした」（20頁）というのです。葉子の母親だけでなく、矢島楯子をモデルにしているとされる五十川女史という人物も、『或る女』の中ではかなり否定的に描かれています。

第2に、葉子の母親・親佐が夫の不倫に怒って葉子とともに仙台に別居したときの話が出てきます。「基督教婦人同盟の運動は、その当時野火のような勢で全国に拡がり始めた赤十字社の勢力にもおさおさ劣らない程の盛況を呈した」（32頁）と書かれています。

第3に、内村鑑三（1861～1930）と見られる内田という人物が登場します。有島は、札幌独立教会の歴史を編纂したことがあって、それが1901年秋、内村鑑三の主宰していた雑誌『聖書之研究』に掲載されました。こうしたことがあったので、内村は有島に大いに期待をしていたようです。しかし、『或る女』では、葉子がアメリカに行くことを決めたときの訪問と関連して、次のように回想されています。少し長い引用になりますが、葉子は

大塚窪町に住む内田という母の友人を訪れた。内田は熱心な基督教の伝道者として、憎む人からは蛇蝎のように憎まれるし、好きな人からは予言者のように崇拜されている天才肌の人だった。葉子は五つか六つの頃母に連れられて、よくその家に入りましたが、人を恐れずにぐんぐん思った事を可愛い口許から云い出す葉子の様子が、始終人から距て

をおかれつけた内田を喜ばしたので、葉子が来ると内田は、何か心のこだわった時でも機嫌を直して、窄った眉根を少しは開きながら、「又小猿が来たな」といって、そのつやつやしたおかっぱを撫で廻しなぞした。〔中略〕葉子は母に黙って時々内田を訪れた。内田は葉子が来るとどんな忙しい時でも自分の部屋に通して笑い話などをした。時には二人だけで郊外の静かな並木道などを散歩したりした。ある時内田はもう娘らしく成長した葉子の手を堅く握って、「お前は神様以外の私の唯一人の道伴れだ」と云った。葉子は不思議な甘い心持ちでその言葉を聞いた。その記憶は永く忘れ得なかった。

それがあの木部との結婚問題が持上ると、内田は否応なしにある日葉子を自分の家に呼びつけた。そして恋人の変身を詰り責める嫉妬深い男のように、火と涙とを眼から迸らせて、打ちもすえかねぬまでに狂い怒った。その時ばかりは葉子も心から激昂させられた。(56～8頁)

というのです。

それだけではありません。葉子に対し、「罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」と言った(58頁)と描かれています。

木部との結婚問題から5年後に、今度は木村と結婚すべくアメリカに行くといふと内田に伝えに行きます。このとき、内田は葉子に会うことを露骨に拒否します。『或る女』の表現から受ける印象では、有島には内村鑑三に対する強い反発があったように感じられますが、内村は、『或る女』が発表された時点ではまだ存命ですから、内田をこのように描くことさえ、有島にとっては控えめなものだったのかもしれませんが。いずれにせよ、『或る女』の中では、葉子は内田に激しく拒否されたまま、アメリカに出かけていくことになります。

第4に、『或る女』には、葉子の女学生時代の回想が挟まっています。『或る女』の中では「赤坂学院」と描かれています。その学校の寄宿舎に葉子は入っていました。14歳の頃、葉子は「基督を恋い恋うて」「十字架を編み込んだ美しい帯」(103頁)を作ろうと、編み物に熱中したことがありました。熱中のあまり、授業中にもそれを編み、教師に見とがめられて、その教師は、その編み物をだれか特定の男性への贈り物に違いないと断定し、その相手の男の名前を言うようにと葉子を脅迫した(74頁)と描かれています。そして、このことを「回想の憤怒」(73頁)とも描いています。

第2として挙げましたところは、キリスト教の拡大という事実に関する話ですから、これを別とすれば、他の3点は、当時のキリスト教徒の否定的な

あり方を描いていると言えます。

以上が、『或る女』の初めの方に出てくるキリスト教に関わる部分です。とはいえ、最初の部分にキリスト教に関わるいろいろな出てきますけれども、そのあとは、あまり出てこなくなります。この作品のちょうど中ごろ、後編の初めの方になると、葉子の婚約者木村——この人にもモデルがいて、有島の友人です——の手紙が出てきます。葉子はアメリカまでやってきたのに病気だからとアメリカに上陸せず、日本に戻ってしまうのですが、木村は、やがて葉子は自分のもとにやってくると考えて、葉子のところに頻繁に手紙を書きます。

僕は繰り返し繰り返し云います。<sup>たとい</sup>縦令貴女にどんな過失どんな誤謬が  
あろうとも、それを耐え忍び、それを許す事に於ては主基督以上の忍耐力  
を持っているのを僕は自ら信じています。(330頁)

というのです。ここで「誤謬」と言われているのは、木村は、葉子がかつて木部という男性と結婚して子をなしたことも知っているのので出てきた言葉です。それにしましても、「基督以上の忍耐力」を持っているという表現はいかげなものかと思えますけれども。

さて、『或る女』に関して、キリスト教との関わりで私が注目したい点は二つあります。

その第1は、日本におけるキリスト教の人間把握に関わる点です。先ほど、葉子の女学生時代に、編み物をしていた葉子に対し、教師がそれを男性に対する捧げ物だと即断し、葉子を厳しく追及したという箇所があることを述べました。つまり、男女関係をかなり厳格に考える傾向が明治期のキリスト教にはあったようです。これに対し、『或る女』で描かれた男女関係は少し違うものです。

私が『或る女』を読みましたときに、印象に残った文言の一つに、葉子が倉地三吉という男性を最初に見たときの表現があります。それは、次のようなものです。——「葉子は、夢ではなく、まがいもなく眼の前に立っている船員を見て、何んという事なしにぎよっと本当に驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイブのように葉子はまじまじと珍しくもない筈の一人の男を見やった。」(93頁)

これと同じような表現が、この作品には、少なくとも3回現われます。「葉

子は禁断の木の實を始めて喰いかいだ原人のような渴慾を我れにもなく煽りたてて」(132頁)という表現があります。さらに、「葉子は失われた樂園を慕い望むイブのように」(187頁)とも描かれています。つまり、葉子と倉地の関係が「始めてアダムを見たイブ」として描かれているわけです。3回も繰り返されますと、なぜ有島はこのように繰り返したのか、それによって有島は、何を表現したかったのか、と考えさせられます。これは、明治時代の日本のキリスト教における男女関係の厳格なとらえ方に対し、有島が批判を込めているのだろうかとも推測しますが、そう断定してよいかどうか、私にはよくわかりません。ただ、志賀直哉や島崎藤村がキリスト教から離れていった背景には、男女関係に厳格な当時のキリスト教の教えがあったということは言えるでしょう。

私が注目したい第2の点は、これは第1の点より重要だと私は思っていますが、この『或る女』の最後の部分に関わります。

葉子は、日本に戻ってきた当初は倉地と親密で深い関係にありましたが、やがて倉地との関係はほとんど切れてしまいます。いくつかの理由がありますが、最も単純な理由は、倉地が葉子との不倫関係を理由に会社を退職させられ、収入がなくなったことです。そこで彼は、港などの情報を外国に売るといふスパイをするようになった。当時の言葉でいえば、露探です。それが発覚したので倉地は警察に追われるようになり、葉子の許に来ることができなくなります。それは、葉子にとっては収入源がなくなることを意味します。また、葉子の婚約者であった木村は、一時はアメリカから葉子に送金してきました。しかし、これもやがて途絶えます。葉子の父親は医者でしたが、遺産をあまり残さず、葉子の手元に残った遺産はもはやありません。まだ小さい娘・定子のことも気になります。葉子は、妹の愛子と貞世を引き取りますが、貞世は腸チフスになって、瀕死の状態になってしまいます。葉子は、貞世の病気が重くなったのは自分が妹の病気に気がつかなかったせいだと思って自分を責めます。と同時に、葉子は「ヒステリー」状態、つまり精神を病んだ状態になり、それが悪化していきます。そこへ、倉地は夫人と葉子以外にも別の女性を「妾」としていたらしいという情報が追い討ちをかけます。ただ、この辺りの描写は、葉子の意識に即して行なわれるといういわば20世紀的な小説の描き方になっていて、どこまでが事実でどこが葉子の思い込みなのか、いささか判然としない部分もありますが、それはさておき、葉子自身も病気になる、手術を控えてひどい腹痛に悩むようになります。こうして、非常に絶望的なところに、絶体絶命ともいうべきところに追い込ま

れるわけです。このところは、次のように描かれています。

又もひどい疼痛が襲い始めた、葉子は神の締め木にかけられて、自分の体が見る見る瘦せて行くのを自分ながら感じた。人々が薄気味悪げに自分を見守っているのにも気が付いた。

それでもとうとうその夜も明け離れた。

葉子は精も根も尽き果てようとしているのを感じた。(555頁)

その葉子が、病室で急に内田、つまり内村鑑三をモデルにした人物を思い出し、葉子の婚約者の木村の友人でもあり、葉子のところを時々訪ねてくれる古藤という人物、有島武郎自身をモデルとしているとのことですが、古藤に、内田が葉子の枕元に来てくれるように伝えてほしいと依頼をします。

『或る女』の最後の場面で、「偏頗で頑固で意地張りな内田の心の奥の奥に小さく潜んでいる澄み透った魂が始めて見えるような心持ちがした」と、葉子の心境が描かれています。つまり、内田（内村といってもよいのですが）が、葉子の木部との結婚にも木村との結婚にも立腹して、葉子に会おうとしなかったことが「偏頗で頑固で意地張りな内田」と言われているわけです。そういう内田ではあるのですけれども、葉子は彼の「心の奥の奥」に希望をつなごうとする。

葉子は誰れにともし何にともしなく息気を引取る前に内田の来るのを祈った。  
(556頁)

と描かれています。

葉子がそういう気持ちに至ったのは、葉子自身の中の気持ちの変化があります。葉子は、自分のことを「呪われた女」(229頁)だと言うようになっています。また、「懺悔の門の堅く閉ざされた暗らい道がただ一筋、葉子の心の眼には行く手に見やられるばかりだった」(371頁)ともあります。(新潮文庫の注釈によれば、有島はこのイメージをダンテから借りて来たとのことです。) こういう葉子自身の自覚が、もう一度内田にすがろうという気持ちを呼び起こしたのだと考えられます。

内田は果たして葉子のところに来てくれるのだろうか、ある種の救いが葉子にあるのだろうか。そういう思いを読者にいだかせるところで、この小説は終るわけです。

葉子自身に神を求める気持ちが芽生え、そこでこの小説が終っているということは、葉子に救いはあるのかということを読者に考えさせる効果を生んでいる、やや抽象的に言えば、読者に信仰について思いを巡らせるようにする効果を生んでいるようにも思えます。

私はここに、明治の基督教の大きな影響力の名残が反映しているようにも感じますが、そういう社会的なことはともかくとして、「背教者」有島武郎は、『或る女』で救いを求める女を描いた。ある意味では非常に基督教的なところを描いている。こういう解釈が成り立つと思います。加賀さんも、大筋では基督教的なもの、あるいは宗教的なものとして、この作品を読んでおられます。

しかし、先にも述べましたように、有島自身は『或る女』について、「現代に於ける女の運命の悲劇的な淋しさ」を表すものだと述べています。『或る女』前編に即して言いますと、次の『アンナ・カレーニナ』との比較のところで述べますが、「女でも胸を張って存分呼吸の出来る生活」(110頁)を求める葉子の姿、「新しい女」と言ってもよい姿が描かれています。その姿と救いを求める女という姿は両立するののか。このように言いますと、今まで述べてきました論を覆すようですが、『或る女』は、葉子を悲劇に追い込んだ社会への批判とも読める。ロンドンでクロボトキンと意気投合し、やがて「宣言一つ」(『改造』1922年1月号)を書き、有島農場の解放を実行した有島。時代が前後しますが、「日本の将来の社会問題の根本問題は都会労働者よりも農民のそれだと思ひます」(矢木沢善次宛、1920年2月11日。『有島武郎全集』第14巻、159頁)と、ある手紙に書いた有島。『或る女』には「農民」は出てこないけれども、このような問題意識を持っていた有島が、『或る女』で救いを求める小説を書いたというのは、やや矛盾する気がしなくもありません。しかし、このように複数の視点からの読み解きが可能だということも、『或る女』の深さを示すものかもしれません。

それに、「新しい女」と言いましても単純ではありません。有島が「現代に於ける女の運命の悲劇的な淋しさ」というときの「女」とは、『或る女』の場合、葉子を指しているのだらうと思いますが、これを愛子、つまり葉子の妹と読んだらどうなるか、という問題があると思います。愛子は、姉の葉子に激しく抑圧されている女性です。葉子と愛子の関係は、有島の中編小説「カインの末裔」における広岡仁右衛門とその妻のような関係ではないか。有島は愛子をどう見ていたのだらうかと思ひます。

#### (四) 『或る女』と『アンナ・カレリーナ』

最後に、有島の『或る女』と、トルストイの『アンナ・カレリーナ』とを、少しだけ比較してみたいと思います。

有島武郎は、トルストイをよく読んでいました。彼自身アメリカに数年間をすごし、そのあとでヨーロッパに回るのですが、ヨーロッパから日本に帰ってくる50日ほどの船旅の際にトルストイの『アンナ・カレリーナ』が愛読書になっていたそうです。有島とトルストイは、ともに地主であるという点が共通していますが、不倫をテーマにしている点でも『或る女』と『アンナ・カレリーナ』とは共通しています。葉子もアンナも、作品の最後で精神的に錯乱していくという点も類似しています。

夫のいるアンナは、ヴロンスキーに強く惹きつけられる。もしもアンナの夫であるカレリーナがアンナとの離婚に同意すれば、アンナの立場は少し楽になったでしょう。それと同じように、倉地が離婚して葉子と結婚すれば、葉子の立場は少し楽にはなったでしょう。(ただし、そうなれば倉地の妻はいへんに困窮すると葉子も考えています。この面は、『アンナ・カレリーナ』にはありません。) いずれにせよ、これら二つの作品には家族制度・戸籍制度における女性の立場の弱さという問題が描かれているように思います。

ただ、倉地は警察に追われるようになるので、葉子と正式に結婚したとしても、葉子の立場が安定することは考えにくいのですが。

ヴロンスキーというアンナの恋人・愛人は軍人ですが、軍人を退役しても収入は途絶えない。なぜならヴロンスキーは広大な土地を持つ貴族だからです。しかし、葉子の恋人あるいは愛人である倉地は船の事務長でして、会社に讒首されると、収入がなくなってしまう。この違いに、ロシアの貴族社会の深さのようなものが感じられます。しかし、『アンナ・カレリーナ』の中には、そういう貴族社会への批判がひそんでいるように思います。有島の『或る女』にも、当時の日本社会への批判が含まれていると思います。葉子がアメリカに行こうと考えた理由のひとつは、「結婚と云うものが一人の女に取って、どれ程生活という実際問題と結び付き、女がどれ程その束縛の下に悩んでいるか」(109頁)を考え、先にふれましたが、「女でも胸を張って存分呼吸の出来る生活」(110頁)がアメリカにはあると考えたからだと思われていますが、これは当時の日本社会のあり方に対する、「新しい女」という観点からの批判でもあります。こういう一種の社会批判を含む点で、二つの作品には共通性があると思います。

それから、アンナは田舎に引籠ってヴロンスキーと2人だけで暮らしてもよいと思っている。しかし、男はしばらくアンナと一緒にいると次第に退屈しはじめます。葉子と倉地の関係も似ていまして、葉子はただ倉地と暮らせれば満足だと思うけれども、倉地は、会社を退職しますから事実上ずっと葉子と一緒にいることは不可能ではありますが、それは別としても、葉子とだけすごす生活にまもなく飽きてしまいます。こういう男女の関係は、『或る女』と『アンナ・カレーニナ』とで、非常に共通しています。

ただ、葉子とアンナの自己理解はかなり違うと思われます。先ほど、葉子には罪の意識が出てきたことを述べました。それに対し、アンナは「罪深い女」だと周囲から言われますけれども、アンナ自身は自分をそのようには思っていなかったのではないかと思います。にもかかわらず、世間のそのような見方がアンナを追いつめていきます。

アンナが自殺したとき、ヴロンスキーの母親は、「あの女の死に方そのものが、宗教を持たないけがらわしい女の死にざままでございますよ」（新潮文庫版、木村浩訳、下・473頁）と言いました。全部で8編から成る『アンナ・カレーニナ』の第7編の最後でアンナは自殺します。そして、最終編の第8編では、リョーヴィン（岩波文庫本ではレーヴィン）の、信仰についての思索が描かれます。リョーヴィンは、『アンナ・カレーニナ』の中で不幸な三角関係に陥ったアンナと対照的に、幸福な結婚をした人として描かれ、それがアンナの悲劇性を際立たせています。そのリョーヴィンの宗教的な思索はアンナ自身のものではありませんし、小説の構成からすれば、いささか付録的ものと見ることができなくもない気がします。

とはいえ、アンナと葉子という不幸な女たちの物語が、信仰に関する思索をもって閉じられているところが、これら二つの作品のキリスト教との深い関わりを思わせませす。

（本稿は、聖学院大学で行なわれた日本ピューリタニズム学会の研究会（2008年9月27日）発表をもとにして、これに加除を施したものである。なお、（三）の部分の要約を中心としたものが、同学会「ニューズレター」（第5号）に掲載された。）

（2008年10月25日脱稿）